

## 複眼思考

滋賀大学経済学部 近藤 豊将

あらゆる学問分野についていえることであろうが、経済学も、それを真剣に学ぶことで、実に多くの副次的な効果が得られる。そのうちのひとつは、視点を転換して物事を考える癖がつくことではないかと思う。「複眼思考<sup>ふくがん</sup>」と言い換えることができるかもしれない。

簡単な経済分析では、消費者と生産者が市場で取引を行う状況を想定することが多い。その際、まず、消費者の目線に立ち、その消費者にとつての最適な行動を調べる。そしてその次の手続きとして、生産者の行動についても同様に分析するのである。ここで、(消費者から生産者へ) 視点の転換が必要になる。さらに、それらの考察を踏まえたうえで、社会全体の長期的な様態<sup>ようたい</sup>の適否<sup>てきひ</sup>が論じられる。

日常生活でも、このように視点を転換して複眼的に考えてみることで、新たに気付くこともある。例えば、授業を受講している大学生にとつて、最重要課題はやはり単位の取得だろう。だが、担当教員としては、試験の採点や成績評価ももちろん大事な仕事だが、それ以上に、受講者が授業内容を理解して自分の将来のた

めに役立ててくれることを望んでいるものだ。

もう一步視点を換え、学長や学部長の目線で考えると、次のようになるだろうか。「本学経済学部は、毎年約五百名ずつ、卒業生を社会に送り出している。そのうち、例年三百名程度は、TOEICで〇〇点以下である。(毎年三百名ずつ、そのような卒業生を出し続けている!) この数字は他大学と比較して見劣りするので、なんらかの対策を講じなければならない。」つまり、大学や学部全体での、社会に対する人材供給のあり方とその外部評価が、無視しえぬ関心事<sup>かんしんじ</sup>になるはずだ。

内閣総理大臣や文部科学大臣なら、次のように考えるかもしれない。「現在、我が国の二十歳人口は〇〇万人で、そのうち大学初級程度の微分積分をマスターしているのは、□□人ほどである。これは、三十年後の一国全体の技術水準を高めるうえで十分な数字ではない。また、放っておくと国民の数学離れはますます進行しているし、個々の大学には毅然<sup>きぜん</sup>として学生を教育するインセンティブが不足している。したがって、国策として大学生全体の学力強化を打ち出すべきだ。」

視野を時間軸上で拡大し、十年後に生まれる日本人の立場で考えると、彼(女)らが、我々世代の活動の帰結としての環境破壊や政府債務累積問題により、迷惑<sup>ごうむ</sup>を被ることはないだろうか。

一万年後の人類は、この時代に生きる我々の活動をどう評価するだろうか。そのような視点を踏まえると、我々が彼（女）らに遺すべきものは何か。これらは、興味深いだけでなく、我々世代の一人ひとりが考えるべき問題ではないだろうか。

大学生たちが、今から意識して複眼思考を鍛えておけば、就職してからも、上司、部下、株主、取引先、顧客など、様々な利害関係者の目線で物事を考え、有意義な仕事ができるようになるかもしれない。将来の人類のためになる新思想を創案する人物も現れるかもしれない。経済学部で学ぶ学生諸君には、どうせなら早くからそのように意識して勉強してもらいたいと思う。

（平成二十六年一月十三日）